

『神殿の基礎とは』 井上隆晶牧師

エズラ記3章10～13節、ヨハネによる福音書2章13～21節

①【宗教生活の基礎とは祭壇を築き、供え物を献げることにある】

今日は旧約聖書のエズラ記からお話をしたいと思います。イスラエルの国はバビロンに滅ぼされましたが、そのバビロンをペルシャの国が滅ぼしました。神様はペルシャのキュロス王の心を動かし、エルサレムの神殿を再建するように命じ、希望する民に帰国することを許してくれました。実に約70年ぶりの帰還になります。彼らは帰って来てそれぞれ自分たちの町に住みましたが、やがてエルサレムに集まって祭壇を築き、献げ物をし始めました。礼拝を始めたということです。

●「リフォーム (Reform)」という言葉 皆さんは聞いたことがあると思います。家を改修することを言いますが、今はリフォームと言わないで「リノベーション (Renovation)」という言葉が使われるようになりました。「修繕、修理」という意味です。リフォームとはむしろ「改善、修整、改革」という意味で、「宗教改革」は英語で「the Reformation」といいます。Reform というと何か新しいことを始めるような印象を持ちますが、もともとの意味は「原型に帰る」ことを言います。「Re=再び、form=形」ですから、元の形に帰ることです。私は神学校の時、「伝統に帰りなさい」と教えられました。伝統というのは教会の本来の姿を指します。その伝統から中世のカトリック教会が外れてしまったので、ルターは元に戻そうとしたのです。ウレスレーも古代教会の教父の伝統に帰ろうとしたのです。彼は祈り書を読み、毎日聖餐をしました。本来の教会の姿に戻すのが宗教改革です。私がしていることはプロテスタント教会の人からは異様に見えますが、伝統に帰っただけです。私が語っていることも、昔の教父や師父たちの教えです。特別なことを語っているわけではありません。宗教生活の基礎とは祭壇を築き、供え物を献げることにあります。祈りを献げ、最終的には自分自身を献げることにあります。

②【自分の罪を知っているからこそ涙を流せる】

さて、彼らは翌年の二月に神殿再建を始めました。それが今日読んだ箇所です。

「主の神殿の基礎が据えられたので、民も皆、主を賛美し大きな叫び声をあげた。昔の神殿を見たことのある多くの年取った祭司、レビ人、家長たちは、この神殿の基礎が据えられるのを見て、大声をあげて泣き、また多くの者が喜びの叫び声をあげた。人々は喜びの叫び声と民の泣く声を識別することができなかった。民の叫び声は非常に大きく、遠くまで響いたからである。」(エズラ3:11～13)

神殿の基礎（礎石）が据えられた時、多くの人の泣き声と叫び声が交じり合い、非常に大きな叫びとなり、遠くまで響いたというのです。今私たちの教会は宗教

法人を取り、土地と建物を母教会から寄付してもらい、礼拝堂を広くしたいと考えています。この土地に建てるのか、別の新しい土地に建てるのかはまだ決まっていますが、教会の礎石が据えられた時、このイスラエルの人々のように大声をあげて泣くでしょうか？彼らはなぜ泣いたのでしょうか。それも昔の神殿を見たことのある人たちが泣いたと書かれています。彼らは美しく、栄光に輝いていた時の神殿を覚えていました。心の中にはそのイメージがまだ残っています。しかし今日の前にあるのは瓦礫と廢墟です。自分の罪によって国を失い、土地を失い、すべてを奪われ、奴隷となって70年の間、他国で生活したのです。人間というのは何かを失わなければ、自分の罪には気がつきません。犠牲がないと人は罪が分からないのです。廢墟の神殿を見て、彼らは自分の罪がはっきりとわかったのだと思います。そんな罪深い自分にもかかわらず、神様は自分たちを憐れみ、再び生きるチャンスをくださいました。神様の憐れみと忍耐が分かったのです。だから泣くのです。この涙は「悔い改めの涙」です。単なる「喜びの涙」ではありません。

11世紀の新神学者シメオンは「涙もなく礼拝を祝い、涙もなく聖体を拝領する者は、礼拝を祝う資格も聖体を受ける資格もない」と言いましたが、それほど涙というのは大切なのです。18世紀のザドーンスクの聖ティーホンは時課祈祷に参加し、ほとんどいつも涙しながら聖歌隊で歌ったといわれています。

●「涙は心を清めるための神の賜物です。これは謙虚さの生きた水です。…修道者は自分の怠惰や罪によって聖霊を失ったから泣くのです。彼はまた、主がいかに人を愛されたかを見、自分がどれほど頑なで、主や隣人に対して愛がないかを見て泣きます。…本当の涙は神のやさしさと威厳さが、あらゆる方向から迫って来たとき、全く自覚せずに流れるものです。…涙はあなたが洗礼のときに受けた恵みを新たにする力があります。…聖霊が与えてくださる涙は甘美で、静かです。…あなたが部屋を出る時、誰もあなたが泣いたとは思えないほど、あなたの顔は喜びにあふれているのです。」(『アトスからの言葉』より)

③【悔いし砕けた魂がなければ】

この神殿は、紀元前517年～518年(ダレイオス王の統治6年目)に完成し、「第二神殿」と言われます。それから五百年後の紀元前19年にヘロデ大王が神殿の大規模拡張工事を行い、紀元後70年に完成しました。彼は90年もの歳月をかけて工事をしたのです。イエス様の生きていた時もこの工事は続けられていました。しかし完成した翌年にローマ軍がエルサレムを包囲し、完全に破壊されてしまいました。なぜこの神殿は建てては崩され、建てては崩されるのでしょうか。それはいくら建物を立派に建てたとしても、そこに集まる民の心がそれにふさわしいものではなかったからでしょう。バビロンから帰って来た民は悔い改めと感謝の心

が一杯だったのに、やがて感謝の心を忘れ、悔い改めの魂を忘れて傲慢になってしまうからです。

天国はただそこに入れば誰でも幸せを感じるのでしょうか。そうではないでしょう。朝から働いた労働者たちは、夕方から働いた労働者が自分たちと同じように扱われ、同じ賃金を貰うのを見て、主人に文句を言いました。王子の婚宴の席に招かれたある人は、礼服を着るのを喜びませんでした。主イエス様は、天国に行っても喜ばない人、文句を言った人がいるとはっきりと言われたのです。そして彼らは天国に居られなかったのです。パウロが言うように「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。」（ローマ 14 : 17）聖霊を獲得しなければ、天国に行っても喜べないのですよ。聖霊は平和と喜びを運んでくるからです。聖霊がなければそれを感じれないのです。私たちの人生とは、天国にふさわしい魂を用意することにあります。それこそ灯火と共に油を用意することなのです。

教会をいくら新しく大きくしたとしても、あなたも苦勞しなければ喜びは薄いでしょう。「ああ、牧師先生や熱心な人が一生懸命されている。私には関係ないや。知らないうちに教会が出来ていた」という心で喜べますか？復活祭でもそうです。なぜ 50 日間の祈禱と修道と断食が必要なのでしょう。知らないうちにレントに入り、知らないうちに復活祭が来ていた、それでどうして感動の涙を流すことができるでしょう。そうやって気がついたら知らないうちに一生が終わるのです。パウロもルターも自分の罪で苦しみました。苦しんだからこそ、そこからは解放してくださったイエス様の福音が有難く感じたのです。

ある修道者が書いていました。「もしあなたがゴルゴダの丘に立っても、神の国に立っても、悔いし砕けた魂を持たなければ感動しないだろう」自分の罪をもっと知るように、神の恵みが分かるように、もっと涙の賜物をくださいと神様に祈りたいと思います。